SHOW-HEYシネマルーム

★★★

ホテル・ムンバイ

2018年／オーストラリア、アメリカ、インド合作映画
配給：ギャガ／123分

2019（令和元）年9月29日鑑賞　｜　ＴＯＨＯシネマズ西宮ＯＳ

Data

監督：アンソニー・マラス
脚本：アンソニー・マラス、ジョン・コリー
出演：デヴ・パテル／アーミー・ハマー／ナザニン・ボニアディ／ティルダ・コブハム・ハーヴェイ／アヌパム・カー／ジェイソン・アイザックス／

■□■ショートコメント■□■

◆タイトルとされている『ホテル・ムンバイ』のムンバイは、インドの最大都市。本作は、そのムンバイで２００８年に起きた同時多発テロによって、五つ星ホテルの「タージマハル・パレスホテル」が襲撃された事件と、その中での人間模様を実話に基づいて描いた映画だ。そう聞くと「こりゃ必見！」と思って劇場へ。

冒頭、イスラム教徒らしい十代の若者たち十数名がタクシーに分乗して各目的地に向かうシークエンスが描かれるが、彼らが背負っている大きなリュックは重そう。きっと、その中に銃や爆弾が入っているのだろう。

しかして、白昼堂々と正面からホテル・ムンバイに入った数名の若者（テロリスト）たちは、「陣取り」を終えると一斉に従業員や宿泊客に向かって無差別に銃を乱射。こりゃメチャクチャだ。ところで、この襲撃団の目的は？

◆１階フロントで一斉乱射を終えた後、テロリストたちは１部屋ずつ回って宿泊客を見つけ次第射殺していたが、ケータイで連絡をとっている姿を見ると、彼らは“あるリーダー”からの指示に従って忠実に動いていることがわかる。しかも、今回は一斉同時多発テロらしいから、そこには何らかの政治的目的（メッセージ）があるはず。

そう思ったが、本作ではムンバイでの同時多発テロの目的が、①外国からインドに来ている金持ちの射殺にあるのか、②彼らを人質にとっての身代金要求にあるのか？③それとも・・・？それが最後までサッパリわからないから、アレレ・・・。

◆ムンバイ（旧称ボンベイ）は、人口１４２８万人でインド最大の大都市。南アジアを代表する世界都市の１つだ。それなのに、大規模テロを鎮圧するための警察は装備等の面

で全く歯がたたないうえ、ニューデリーから呼び寄せる特殊部隊の到着には数十時間を要するらしい。そんなバカな・・・？そう思ったが、スクリーン上には「待機」を命じられたけれども、現状を黙視できない地元の警官数名が、危険を覚悟でホテル内に踏み込んでいく姿が描かれる。しかし、この人数と装備では・・・？また、このへっぴり腰では・・・？そう思っていると、案の定・・・。

◆本作のホテル側の主人公は、従業員でシーク教徒であるアルジュン（デヴ・パテル）と料理長として調理場を仕切っている男オベロイ（アヌパム・カー）。襲撃事件を知った彼らが、自らの命よりも宿泊客の命を優先し、お客サマを守るべく奮闘したというのが、本作を監督したアンソニー・マラスの本作の目的だから、カメラが彼らの動きを注視するのは当然。

もっとも、彼らができることは、客をできるだけ安全な場所に匿い、特殊部隊の到着を待つことだけだが・・・。

◆ホテルの宿泊客が多種多様であるのは当然。そこで、本作では裕福な夫婦のデヴィッド（アーミー・ハマー）とザーラ（ナザニン・ボニアディ）や、あるシーンでロシアの特殊部隊の将校であることが判明する客ワシリー（ジェイソン・アイザックス）等が登場する。そして、彼らがテロリストから逃げ回ったり人質にとられたりしながらも、懸命にテロリストと対峙する姿が描かれる。

もちろん、それはそれなりの人間ドラマに仕上がっているが、私の目にはリアル感がイマイチ。なぜなら、そもそもテロリストたちの行動に一貫性がないうえ、彼ら宿泊客の行動にも一貫性が見えないからだ。しかも、全く言葉が通じるはずがないのに、一体どうやってあんな風にうまく人質にとることができるの・・・？

◆その他、本作について私は疑問点ばかりが目についたので、途中から少しウンザリ。鑑賞後に資料を見ると、アンソニー・マラス監督は、タージマハル・パレスホテル襲撃事件のニュースを聞いたとき、「５００人以上もの人々が巻き込まれながら、３２人しか死者が出なかったという奇跡に驚いた」そうだが、本作冒頭のあれだけの乱射で、たった３２しか死亡しなかったとういうのは到底信じられない。すると、本作冒頭のシーンはあまりに大げさすぎ・・・？

そこで、あらためて考えるべきは、本件テロの若者たちは一体何のためにホテル・ムンバイを襲撃したの？ということ。ホテル・ムンバイ襲撃事件を描く映画では、何よりもそのことの解明が必要だったのでは・・・？

２０１９（令和元）年１０月３日記